

4 . 捕獲手法

ヌートリア、アライグマ及びハクビシンを効率的に捕獲するには次のような事項がポイントとなります。

4-1 捕獲箱設置前のポイント

捕獲前の確認事項

被害状況、被害作物、被害環境等の確認

何がどのように被害を受けたか、周囲に被害を受けたものはないか確認します(被害作物の例などは2章を参照)。

どの種による被害か特定するポイントになります。



ヌートリアにより被害を受けたイネ。田植え直後の被害が最も多い。



アライグマの天井裏への侵入があった寺院



ハクビシンに食害されたブドウ。ブドウ棚から顔だけを棚下に突き出して、袋を口で破る。

必要な捕獲許可の取得

鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律に基づき、市町村に申請し必要な鳥獣捕獲許可を取得します。

捕獲実施上の注意事項

捕獲時の安全性の確認

捕獲箱の種類によっては危険を伴います。特に捕獲箱の蓋がバネで閉まるタイプは、蓋が閉まる際に反動で器具の一部が外れたりしないよう注意します。作業や周囲の安全確保が不可欠です。周辺で子供が遊んだりすることがないか、壊れやすいものなどが十分確認します。思わぬ事故が起きることのないよう注意します。

革手袋の着用

捕獲箱及び捕獲個体の取り扱いに際しては、けがなどを防止するため、必ず革手袋を着用します。

4-2 捕獲箱設置場所のポイント

設置場所周辺の環境

周辺環境の把握

目撃・被害情報は、地図上に地点、月日を書き込み、整理します。設置場所、設置期間等の判断材料となります。近所からの聞き取りも重要な情報源となります。



ハクビシンの被害があった果樹園(ブドウ園)

フィールドサインの確認

足跡、糞、食痕等のフィールドサインの確認

フィールドサインは、どの種がどの辺りで行動していたかの手がかりとなります。被害場所を中心にその周辺も含めて、足跡、糞、食痕等を探します。雨上がりなど地面の柔らかいときには、足跡の確認に適しています。



ヌートリアの糞(太さ1cm、長さ3cmのバナナ状)



ヌートリアの食痕(イネの茎)



ブドウ棚直下に散乱しているハクビシンの食痕(ブドウの果皮)



ハクビシンの食痕（スイカ）

侵入経路の把握

河川、水路、ため池、建物、獣道等の位置関係を確認し、侵入経路の把握に努めます。侵入経路の把握は、捕獲箱設置の重要なポイントとなります。

ヌートリアの場合、水辺から5～10mほどしか離れないため、フィールドサインの確認は水辺周辺を重点的に行います。侵入経路には尻尾の引きずり痕が残ります。足跡やイネなどの倒伏状況からも侵入・移動経路が把握できます。

アライグマの場合、人が利用している山道やU字溝などを利用して夜間に裏庭などへ侵入することもあります。



アライグマが侵入してきたと思われる経路

4-3 捕獲箱設置方法のポイント

捕獲箱の設置

侵入経路上やフィールドサイン周辺に設置

侵入経路上に捕獲箱を設置することが最も効果的です。侵入経路が特定できない場合は、フィールドサインのある場所や被害場所に設置します。

設置する際には、罠が正しく作動し、容易に転倒しない場所であるか確認します。

罠の種類・サイズ・向き

基本的に捕獲箱を使用

基本的に、捕獲箱またはそれに類する器具を使用して捕獲を行います。使いやすさや安全性の面から、捕獲箱を使用します。



捕獲箱

罠の作動方式の工夫

捕獲箱では餌を仕掛けた部分が押されると作動するものと、引き寄せられると作動するものがあります。取り逃がしがある場合や捕獲効率の上がない場合は、作動方式の異なる捕獲箱を使用するの一つの方法です。

搬送や設置が容易なものを使用

捕獲箱の大きさに制約はありませんが、搬送や設置が容易なものを使用します。捕獲箱の大きさによる捕獲効率には大きな差はないようですが、小さすぎると警戒心が増すようです。

捕獲箱の蓋の閉まる仕掛けは、フック式と踏み板式に大別されます。また、蓋の形状はハッチ方式とスライド扉方式に大別されます。この他、片側だけが蓋になっているものと、両側に蓋が付いているものがあります。

捕獲箱の大きさは次のような使用事例があり、概ねこれ以上の大きさが目安です。

約 20×20×60cm (対象：ヌートリア)

約 30×30×70cm (対象：ヌートリア)

約 30×30×100cm (対象：ハクビシン)

約 40×40×80cm (対象：アライグマ・ハクビシン)



アライグマの捕獲を目的として設置された丈夫な捕獲箱 (約 60×60×100cm)

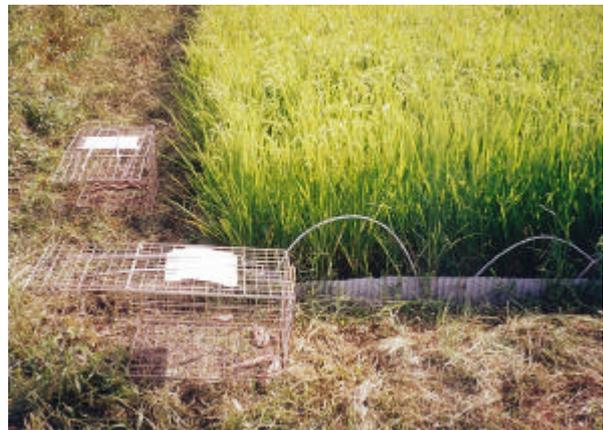


ハクビシンの捕獲を目的として設置された捕獲箱
蓋が両開きのタイプである(約 30×30×100cm)

接近してくる方向に入り口を向けて設置

捕獲箱を設置する際には、入り口を接近方向に向けて設置します。昼間はねぐらに潜んでおり、日が暮れると侵入してきます(同じ経路で侵入してくることが多いようです)。

ヌートリアの場合、水辺からの上陸場所や巣穴の前も重要なポイントとなります。その際には、入り口を水辺側へ向けて設置します。



ヌートリアの捕獲を目的として設置された捕獲箱
水路側(左側)へ向けて設置(約 40×45×60cm)



アライグマの捕獲を目的として、入り口は山側（手前）へ向けられ、通り道と思われる外壁沿いに設置された捕獲箱

その他、捕獲箱設置に際しての留意事項

- ・ 捕獲箱の消臭
- ・ 捕獲箱の格子目の大きさ
- ・ 餌の臭いを一方向から出す

野生動物は警戒心が強く、特に人間の臭いには敏感です。設置した捕獲箱には、必要に応じて水をかけて人や機械油、金属の臭い消しを行います。購入後に雨水にさらすのもよい方法です。

捕獲箱の大きさにより捕獲の効率が大きく変化することはないと考えられますが、捕獲された後に、格子目が粗いため、小さい個体が逃げ出した事例があります。

餌の臭いが入り口以外から漏れないようにラップやビニール袋で捕獲箱を覆うことがよいこともあります。

罠の設置時期・個数・期間

農作物の栽培・収穫時期に合わせて捕獲箱を設置

作物の収穫時期には、農作物を目当てに活発に活動するため、この時期に設置することが多くなっています。

ヌートリアの場合、春はイネの新芽、秋から冬にかけては野菜類の被害が増加す

る時期です。

ハクビシンの場合、ブドウ園の事例では、ブドウが実る前の時期に捕獲されることが多くなっています。

5月下旬から8月下旬にかけ、被害場所に応じて、適宜設置場所を移動する事例もあり、捕獲できない場合は参考にします。

早期捕獲に努め、誤作動に対応する場合は、複数個の捕獲箱を設置

繁殖期前に捕獲することが重要です。また、誤作動、複数出没に対応のため、1箇所に複数個の罠を設置することにより捕獲の効率が上がります。複数の痕跡が見られる場合や近くで繁殖している場合には、複数個の罠で同時に捕獲され効果を上げた事例もあります。

なお、複数個の罠を設置する場合には、1日に巡回できる個数までとします。

ヌートリアやアライグマは、親子での行動が知られているため、罠を数個設置すると効果的です。

設置期間は、1週間～2ヶ月程度が目安

ヌートリアは比較的短期間(1日～1週間)で捕獲されることが多いようですが、設置から捕獲までの日数は、出没頻度の影響を受けやすいと考えられます。出没頻度が高く、糞や足跡、通り道のような痕跡が残されている場合、続けて複数の個体が捕獲された事例もあります。

アライグマ、ハクビシンは、ヌートリアより期間を要することが多く、1～2ヶ月程度が目安です。

被害、フィールドサイン等の条件に応じて設置期間の伸縮をします。

餌の種類・量

餌は、多種・多様なものが使用できるが、在来種や犬猫の誤捕獲を避けるように配慮

- ・被害作物
- ・入手しやすいもの
- ・臭いで誘引しやすいもの
- ・取り扱いやすいもの(菓子類・芋類)など

ヌートリアは、基本的には草食性であるため、甘みのある根菜類(ニンジン、イモ類、ダイコン、カボチャ)及び果物類(スイカ、メロン、リンゴ)を好みます。イモ類では、ジャガイモよりもサツマイモを好むようです。

餌の量は、1個から数個まで様々です。

アライグマの場合、侵入経路上に適切に設置すれば、餌の種類は問いません。主にパンやバナナが使用されています。また、誘引しやすくするため、焼きスルメを用いる例もあります。住宅地では、菓子類(揚げパン、キャラメル味のコーン菓子等)が簡便に使用できます。ただし、野良犬や野良猫もかかることに留意し、定期的な巡回を欠かさないようにします。

ハクビシンは雑食性ですが、基本的に果物類や菓子類といった甘いものを好むようです。主に果物類(ブドウ、ウリ、メロン、リンゴ等)が使用されています。また、1個の捕獲箱に複数種類の餌を使用して工夫した事例もあります。なお、他の動物が掛かるのを防ぐため、肉などの生餌は避け、夏季には果物類、野菜類の腐敗が進行するため、早めの交換が必要です。

その他の工夫

- ・撒き餌
- ・餌の組み合わせ
- ・餌が罠の入り口以外から見えない工夫

捕獲箱への警戒心を薄れさせるため、捕獲箱設置直前に餌を少し撒いて、餌を食べに来ることを確認後、翌日設置すると高い捕獲の効率が期待できます。また、捕獲箱の中もしくは捕獲箱の周辺に撒き餌を行い、誘引力を高める方法もあります。

捕獲対象種が複数種の場合、複数種の餌を組み合わせると効果的です。その場合、好みが重複している餌を選定することがポイントです。



ヌートリアの捕獲を目的として、サツマイモ 10 個程度を使用した捕獲箱 (約 40 × 45 × 60 cm)



ハクビシンの捕獲を目的として、ブドウ及びウリを使用した捕獲箱 (約 30 × 40 × 60 cm)

取り逃がしの防止

捕獲後の捕獲箱の転倒や破損の防止

取り逃がしを防ぐため、捕獲箱の転倒や蓋の開放がないよう注意します。

特にアライグマの場合、器用な前足で蓋を持ち上げ逃げるおそれがあるので、蓋が開かないように返しをつけるようにします。また、非常に力が強く金網に穴を開けることもあるので、捕獲箱はできるだけ丈夫なものを使用します。

捕獲箱の取り扱い

捕獲箱には標識を装着

捕獲箱には住所、氏名、許可者、許可年月日、許可番号、捕獲目的、許可有効期限を明記した標識を装着し、有害鳥獣捕獲許可があることを明示します。



捕獲箱に装着した標識

4-4 捕獲箱設置後のポイント

巡回

原則として毎朝巡回

夜間に捕獲されることが多いため、捕獲箱設置期間中は、原則として毎朝巡回を行います。

特に、食性・生息域の類似する種(タヌキ、アナグマ等)が誤って捕獲される可能性や、民家の多い郊外付近では、犬や猫が捕獲される可能性があります。この場合には、タヌキなどは速やかに放し、犬などは飼い主に連絡するなどし、巡回頻度を増やします。

餌の交換頻度

新鮮な餌を供給

果物類は、多少熟した方が誘引力が増すと考えられますが、腐敗した餌については、誘引力が低下し、捕獲効率が下がってしまいます。また、住宅地内では衛生面からできるだけ新鮮な餌を供給するよう心がけます。

捕獲箱の撤去

捕獲期間終了後は、速やかに捕獲箱を撤去

捕獲箱の設置中は適正な管理(巡回など)を行い、捕獲期間終了後は、速やかに撤去します。

なお、使用後の罠は、適宜洗浄するなど清潔に努めます。

4-5 捕獲後の処理のポイント

捕獲個体に苦痛を与えない配慮

捕獲後に致死処理を行う場合は、できる限り動物に苦痛を与えないよう配慮

動物の愛護及び管理に関する法律に基づく動物の処分方法に関する指針(平成7年7月4日総理府公示第40号)においては、化学的又は物理的方法により、できる限り処分動物に苦痛を与えない方法を用いて、その動物を意識の喪失状態にし、心肺機能又は肺機能を停止させる方法や、社会的に認められている方法によることとされています。

この指針では、具体的な方法は示されていませんが、具体事例として、アメリカ獣医学会(AVMA)のガイドライン(2000年)が参考になります。

このなかで吸入剤(吸入麻酔薬、炭酸ガス等)、非吸入性薬剤(バルビツール酸誘導体(向精神剤)、麻酔下の塩化カリウムなど)、物理的方法(銃撃など)等が紹介されています。

致死処理を行う場合は、こうしたものを参考にするなど、できる限り苦痛を与えないよう努めます。

また、捕獲個体の搬送、処理するまでの取扱いに当たっても、できる限り苦痛を与えないよう努めます。

今後、処理方法や実施体制など早期の確立が望まれます。

公衆衛生などの配慮

動物の死体は、捕獲場所を問わず野原などに放置せず、速やかに処分

できるだけ焼却することとし、やむを得

ず埋設する場合は、悪臭の発生や衛生害虫の発生防止など公衆衛生に配慮するとともに、周辺に生息する野生動物による掘り返しの防止などに留意します。

取扱者は、革手袋の着用や手洗いを励行

動物には、ダニ、寄生虫その他病原菌(場合によっては感染症)を保有していることも考えられるため、捕獲した動物の取り扱いに当たって、接触する際は革手袋を使用し、接触や糞の始末の後は十分に手洗いなどを行うとともに、咬傷や搔傷を受けた場合は速やかに消毒、必要に応じて医師の診察を受けるなど適切な措置を行います。

動物由来の感染症には、狂犬病(症状：発熱、頭痛、筋肉痛、疲労感、悪心嘔吐、咬傷部の疼痛、知覚異常、錯誤、幻覚、恐水症等)、レプトスピラ症(症状：発熱、腹痛、下痢、ふるえ、結膜充血、嘔吐、筋肉痛、黄疸等)、Q熱(症状：発熱、頭痛、悪寒、筋肉痛、気管支炎、肺炎、肝炎、髄膜炎、心内膜炎等)、アライグマ回虫症(症状：好酸球性髄膜脳炎、網膜炎)等がありますので十分注意します。

その他

捕獲個体のデータを記録・整理

今後の参考とするために、捕獲個体については、成獣・幼獣の別、外部計測、性別等の記録に努めます。